

歩兵第百二十三連隊部隊略歴

連隊長 新関 栄作

| 年月日 | 概要 |
|---------------------|--|
| 第一五八、一 | 編成改正に依り留守ヲ十二師団の隷下を脱し歩兵ヲ十四連隊留守隊の任務を解 |
| 八六、三四 | 除せられ新に歩兵第百二十三連隊を編成、ヲ六十六独立歩兵団の隷下に入る 編成改正に依り熊本歩兵第十三連隊補充隊に移駐併合し、ヲ四十六師団の隷下 に入る |
| 六、三四 | 動員下令 |
| 一〇、三〇 | 編成完結 |
| 一〇、三一 | 熊本出發 |
| 二、一 | 内司港出帆 |
| 一、九、一、二 | 小ノスンダ列島ノスンバレ島上陸 尔後濠北地区防衛作戰に從事 |
| 自一八、一、三 至一九、一、二 | 輸送向下士官八名戦病死 |
| 自一九、一、三 至二〇、一、三一 | ノスンバレ島に於て濠北地区警備中、戦死兵三名 戦病死将校一名 下士官二 十六名 |
| 二〇、二、一 | 馬來地区へ転進下令 |

マニラ以外

| | | | |
|----------------|---|----------------|--|
| 三三二 四一七 | スンバ島出発 昭南上陸 尔後馬來 南部地区警備 | 自 二〇 六三〇 | 「スンバ」島より馬來地区に戦進間戦死(戦死認定を含む)下士官兵六十六名 戦病死下士官兵七名 |
| 自 二〇 八一四 | 南部馬來地区警備に於て戦死将校一名 下士官兵九名 戦病死下士官兵六名 | 自 二〇 八一五 | 終戦後警備に於て戦死下士官兵六名 戦病死将校三名 下士官兵十七名 |
| 三二 | 終戦以来離隊逃亡の修行方不明なる者下士官兵六名 復員完結 歴代部隊長名 一 大佐 水島 毅 滋 雄 二 大佐 上村 栄 人 三 大佐 中 條 豊 馬 四 大佐 新 岡 栄 作 部隊事情精通者 熊本県熊本市大江町五七一 陸軍少佐 倉 田 一 馬 | | |

| | |
|--------|--|
| 年月日 | |
| 概 要 | <p>熊本県阿蘇郡山西村大字宮山一三〇〇</p> <p>陸軍大尉 山口光雄</p> <p>大分県東国頭郡富来村</p> <p>陸軍中尉 奥村辰美</p> |

(266)

1895

坂兵ヲ百四十七連隊部隊略歴

連隊長 西連寺 元

| 年月日 | 概要 | 要 |
|---------|-------------------------------------|---|
| 昭八、一〇、〇 | 軍令陸甲ヲ九十五号に依る臨時勤員下令 | |
| 二、一〇 | 郡城市に於て坂兵ヲ百四十七連隊編成完結 | |
| 一、一、一七 | 濠北水遣の海郡城市出発 | |
| 一、一、三三 | 内司港出発 | |
| 三、一、七 | 南緯七度二十六分、東経百十五度五十五分ヲカンゲンシ列島ヲセパンジャレ | |
| | 島南三十度十六分に於て航行中敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、輸送船ヲ日南丸レ | |
| | 棄沈せられ、連隊長田茂大佐以下将校九名、准士官十二名、兵百二十五名、計 | |
| | 百四十七名戦死シ、戦傷死一名を出せり | |
| 三、一、三 | 連隊主力は「スンバワ」島上陸 | |
| 三、一、七 | カ三大隊は「スンパレ」島ト | |
| 四、一、五 | カ一中隊は「フロレス」島ト | |
| 四、一、三 | カ五中隊は「ロンボック」島ト | |
| | 夫々上陸シ、尔来濠北地区防衛に任ず | |
| | 本防衛間連合軍飛行機の攻撃を受け、兵二名戦死シ、戦病死将校二名、下士官 | |
| | 一名、兵一〇名、計十五名戦死、戦病死を出す | |

| 年月日 | 概要 |
|--------|--|
| 昭五、四、二 | 連隊長西連寺大佐、連隊長に命令せうれ |
| 四、三 | 着任す |
| 六、三 | カ一大隊主力（カニ中隊カ一歩兵砲中隊欠）は「スンパロ」島を、カ一中隊は「フロレンス」島を夫々出發、「セラム」島防衛の爲激遣す |
| 二〇、三、一 | <p>「ニ」 堅依命甲才三九四号に依り、前進の爲主力は「スンパロ」島を其他は夫々の島嶼を出發、「カ」スングレ列島を依り馬來に向い前進す</p> <p>同時に「セラム」島激遣中、カ一大隊主力（カニ中隊カ一歩兵砲中隊欠）は台湾歩兵カニ連隊に転属せしめらる</p> <p>隊</p> <p>台湾歩兵カニ連隊カニ大隊の主力（大隊本部歩兵ニヶ中隊）連隊に転入せうれ</p> <p>編成の一部を改編せらる</p> |
| 四、八 | <p>連隊は昭南島に上陸し、馬來馬來半島「ジヨホール」州にて南部馬來地区防衛に任す</p> <p>本報進間連合軍飛行機攻撃を受け兵四名戦死し、敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、軍艦五十餘沈没し兵六名戦死し、戦病者四名、計十四名の戦死、戦病死者を出せり</p> <p>尚、馬來防衛間「ジヨホール」州共産匪討伐中、将校一名、下士官二名、兵二名戦死者を出し、戦病死者五名を出せり</p> |

マライ六四

二〇、五、一

一般歩兵中隊兵力充実の爲衛生隊を師団命令に依り解散し夫々一般中隊に充
足し戦力の充実を回したり

八、二四

終戦

外、二六

軍命に依り昭南神社に於て軍旗を奉焼す

一〇、二六

連合軍の命に依りコリオレ諸島コレンパンレ島南部地区に後駐紮結す

二、六、一四

オニ十一救田としてコレンパンレ島出発

七、二

鹿児島上陸

七、三

鹿児島に於て復員完結

歴代部隊長名

自一八、二一〇

大佐 田尻那彦 (昭一六、三、二七カンゲアン列島、戦死)

自一九、四、二

大佐 西連寺 元

至三、七、三

部隊事情精通者

大分県宇佐郡四日市町川上

陸軍少佐 池上 秀俊

大分県速見郡東山香村倉成

陸軍大尉 川柳 利男

宮崎県児湯郡高鍋町上江

マシイ 六五内

| | |
|--|---|
| | 年 月 日 |
| <p style="text-align: center;">大分県中津市一三番地</p> <p style="text-align: center;">陸軍准尉</p> <p style="text-align: center;">馬渡 殊夫</p> <p style="text-align: center;">宮崎県湯那川南村平田</p> <p style="text-align: center;">陸軍曹長</p> <p style="text-align: center;">中村 義男</p> <p style="text-align: center;">陸軍曹長</p> <p style="text-align: center;">富永 久信</p> | <p style="text-align: center;">概</p> <p style="text-align: center;">要</p> |

第四十六師団通信隊部隊略歴

隊長 郷原 博

| 年月日 | 概 | 要 |
|---------------------|---|---|
| 昭一八七、五 一〇、三〇 | 編成完結 動員下令 | |
| 一九、一、一〇 | 動員完結 | |
| 一、三、三 | 南方激闘のため竹司港出帆 | |
| 二、五 | スラバヤ着 | |
| 三、七 | スラバヤ発 | |
| 三、二七 | カンゲン列島セパンジヤン島沖合を航行中、敵潜水艦の魚雷攻撃を受け通信隊長及下士官共二十九名戦死 | |
| 三、七 | 有線一ヶ小隊及無線四ヶ分隊を以てスンバ島上陸 | |
| 三、三一 | 主力を以てスンバ島ビマ上陸 | |
| 自一九、四、一 至一九、三、三一 | 濠北地区防衛作戦 | |
| 自二〇、一、一 至二〇、三、三一 | 濠北地区防衛カー号作戦 | |
| 二〇、二、一四 | 転進のためスンバ島ビマ出帆 | |
| 四、七 | スンバ島ビルマ北々西海上に於て後発部隊として航行中敵潜水艦の魚雷攻撃を | |

| 年月日 | 概要 |
|---|--|
| 昭二〇、五、三一 四、一八 自二〇、四、一九 至二〇、八、一三 八、一四 二、六、二 | 受け突一名生死不明 右戦死認定 昭南上陸 南部馬束地区防衛作戦 終戦 大竹上陸帰還 歴代部隊長名 1. 大尉 小八重秀男 2. 大尉 原田孫助 3. 大尉 郷原博 部隊事情精通者 鹿児島県日置郡串木野下名一〇三三〇 陸軍中尉 畠宿助一 大分県北海部郡下北津留村大字稻田二六九一 陸軍曹長 足立守道 |

要

0001

(22)

1901

第四十六師田野戦病院部隊略歴

病院長 田中平吉

| 年月日 | 概 | 要 |
|----------|--|---|
| 昭一八、一、一〇 | 熊本市に於て編成完結 | |
| 一、一三 | 南方冰童のため門司港出發 | |
| 二、一五 | 昭南港着 | |
| 三、一七 | 昭南港出發 | |
| 三、一七 | 小スンダ列島輸送中ロンボシク島北方カンゲアン列島セパンジヤン島東南方沖に於て敵潜水艦の魚雷攻撃を受け輸送船沈没し、舟楫四、准士官、下士官共四 | |
| 三、一七 | 三、軍属一、戦死、負傷者一六入院（内下士官一戦傷死） | |
| 四、一 | 小スンダ列島スンバウ島ビマ着 | |
| 四、一 | 本後濠北地区防衛作戦に参加 | |
| 九、三五 | 後発隊（原田隊）本隊追及のため博多港出發 | |
| 一〇、一二 | 後発隊（原田隊）輸送途中台湾高雄市に於て敵飛行機の爆撃を受け矢三戦死 | |
| 一〇、一二 | 負傷者六入院 | |
| 一〇、一七 | 後発隊（藤岡隊）本隊追及のため門司港出發 | |
| 一、一二 | 後発隊（藤岡隊）輸送途中ロンボク島に於て敵飛行機の爆撃を受け矢一戦死 | |
| 一、一二 | 負傷者一入院 | |

| 年月日 | 概 |
|---------|---|
| 昭二〇、三、一 | 南馬來に軟進 |
| 三、二 | 軟進輸送途中フロレス島ケテンデに於て敵飛行機の爆撃を受け將校一、准士官 |
| 四、七 | 軟進輸送途中スニバワ島ビマ沖に於て敵潜水艦の魚雷攻撃を受け輸送船沈没し 將校四、下士官一〇戦死 負傷者五入院 |
| 六、八 | 軟進輸送途中バンカ海峡に於て敵潜水艦の魚雷攻撃を受け輸送船沈没し將校一 戦死 |
| 五、二 | 馬來半島ジヨホール州クルアン着 |
| 八、二〇 | 爾後ジヨホール州警備 |
| 九、二 | マライ半島ジヨホール州セマランに於て連絡を断 下士官一生死不明 |
| 一〇、三六 | 終戦迄の死没者、下士官一 |
| 一〇、三六 | レンパン島移駐のためジヨホール州クルアンに出發 リオ諸島レンパン島上陸 |
| 三、一五 | レンパン島千島川河口に於て海草採取中下士官一溺死 |
| 三、六、一四 | 復員内地帰還の爲レンパン島出發 |

マライ半島

鹿嶋島上陸

歴代部隊長名

陸軍軍医大佐 田中平吉

部隊事情精通者

秋田県南秋田郡上新城村五十町大村屋敷一九一

診療主任 陸軍軍医少佐 佐藤栄司

山口県山口市上金古曾三ノ七二

療養主任 陸軍軍医大尉 牧野 保

宮崎県児湯郡都農町大字川北四九五〇

人事係 陸軍衛生中尉 河野 藤義

大分県東国東郡旭日村大字綱井五七八

一般療養 陸軍衛生少尉 高橋 正宏

大分県大分郡谷村大字鬼崎一四五一ノ二

人事係 陸軍衛生准尉 平本 常善

第四十六師団特設挺身隊部隊略歴
隊長 野原 静

| 年月日 | 概 |
|---------|-----------------------------------|
| 昭一八〇、二八 | 歩兵第四十五連隊を一次先遣隊として濠北地区派遣のため門司港出帆 |
| 二、三 | 任地「フロレス」島「マルメラ」上陸 |
| 五、七、一五 | その後、濠北地区防衛作戦に従事す |
| 九、五 | 全員が第四十六師団司令部に転属 |
| 一〇、二、二 | が四十六師団特設挺身隊を編成、引続、濠北地区防衛作戦に従事す |
| 二、三 | 「フロレス」島「ケテンデ」に於て敵機の攻撃を受け岡川上等兵戦死す |
| 三、一 | 馬来方面転進のため「フロレス」島「マルメラ」出発 |
| 四、三 | 「フロレス」島「ラバンジヨ」に於て敵機の攻撃を受け原田上等兵戦死す |
| 六、一六 | 新任地「昭南」に上陸 |
| 八、一四 | 同日より南部馬来地区防衛に従事す |
| | 太田黒上等兵「ジヨホルバル」に於て戦病死す |
| | 終戦 |
| | 歴代部隊長名 |
| | 大尉 三原 博 大尉 上迫 清志 |

概

要

3. 中尉 野原 静

部隊事情精進者

鹿児島県鹿児島郡西杵島村赤生原一四六

陸軍中尉 野原 静

大分県玖珠郡東飯田村大字松木七六番地

陸軍曹長 湯 茂 英 雄

一九、一、二三 歩兵才百四十五連隊ヲ二次先遣隊として濠北旅團のため内司港出發

三、二七 十時二分濠北ヲカンゲンシ列島東北海上二十哩の地点に於て敵潛水艦の攻撃

を受け才二次先遣隊長山内中尉以下十六名戦死す

三、三一 小スンダ列島ヲスンバワレ島に上陸

五、二八 ンスンバワレ島出發

六、一 フロレスレ島ヲマルメラレに上陸ヤ一次先遣隊と合流シ濠北地区防衛に從事

才二次先遣隊長 陸軍中尉 山内 友

マライ六七外
(

1000

(268)

1907

独立混成隊二五連隊部隊略歴（遊二二九三五）

陸軍大佐 家村新七

| 年月日 | 概 | 要 |
|------------------|-------------------------------------|---|
| 昭和三十八 | 満洲牡丹江に於て編成完結 | |
| 八、一 | 編成はオ三軍之を担任、オ九師団の教官人員を基幹とせり | |
| 八、七 | 連隊長は編成以來後買込家村新七なり | |
| 八、一七 | 釜山に集結約一ヶ月同地に満首編成の充実、教育訓練に従事す | |
| 九、二九 | 宇岳に集結約一週間満首装置の改設、教育、訓練に従事す | |
| 自一〇、上旬 至一一、中旬 | 戦艦により北コボルネオに輸送せられ前田島（ラブアン島）に上陸す | |
| 二〇、一、中旬 | 任務に基き、連隊主力は「タツイ」島に、オ二大隊は「サンダカン」に | |
| 二五 | 分進——各該地の守備に就き、尔後同地の防衛を担任す 連隊主力の輸送によ | |
| 二七 | り若干の被害（船沈没により主として装備に）ありたるも他は無事任に就けり | |
| | オ二大隊は「ビツセルトン」に転進の命を受け陸路行軍を為し同時に俘虜護送 | |
| | を担任す | |
| | 連隊主力、亦右に転進の命を受け任地出帆、先づ「タフオ」に上陸す | |
| | 「タフオ」を出発、不毛の行程二五〇哩を「ビツセルトン」に至る行軍を敢行 | |
| | す | |
| | 途中、気象、給養、医療の極の不良の爲、栄養失調、「マラリヤ」患者を多発 | |

| 年月日 | 概 | 要 |
|---------------------|---|-------------------------------|
| 自昭二〇、三、一二 至 八、一四 | して斃るるもの続發し、數ヶ月を費して任地に到着せるもの出發人員八〇〇名中二〇〇名余に過ぎず、 行軍により体力軟弱者は「タフオレ」に殘置、荷物と共に隨時且及せしむ | 連隊全カ及「ヒツセルトン」に駐屯部隊を併せ同地防衛を担任す |
| 自 八、一五 至 二、三、二八 | 当初濠軍の後、英印軍の収容所に入り作業に従事す | 連隊主力は大竹港に上陸 |
| 四、一四 一五 | 復員完了 | 復員完了 |
| 歴代部隊長 | 陸軍大佐 家村 新七 | 陸軍大佐 家村 新七 |
| 部隊事情精通者 | 滋賀泉坂田郡春熟村字高春 | 滋賀泉坂田郡春熟村字高春 |
| 部隊先發者 | 五名 | 陸軍大尉 嶋田 正男 |
| 「クナン」に在りし下士官以下十二名 | 「ボゴタ」丸により復員 | 「ボゴタ」丸により復員 |
| 部隊主力 大柴丸に帰還 | 前記人員表の通り | 前記人員表の通り |
| 復員 | | |

ホルネオレ

「セツセルトン」に入院せる患者七十六名は、同病院と共に帰還復員の予定な
り。特業者として「セツセルトン」に残留せる人員 十名及び「パパン」島作業隊に
参加せる人員二十五名は「ホルネオレ」最後尾引揚部隊と共に復員する予定なり
満州出發当時の編成

カ一大隊

歩兵 三ヶ中隊各中隊

96g(6)
89MW(13)
38銃(11)

機関銃一ヶ中隊

2719(4)

カ二大隊

右に同じ

カ三大隊

右に同じ

歩兵砲中隊

4184(4)

速射砲中隊

977A(6)

工兵中隊

編成総員 二一三六名

指揮系統

編成当時 カ三軍

在「ホルネオレ」面 カ三十七軍

(269)

1910

独立歩兵第四三二大隊部隊略歴

陸軍火佐 田村初雄

| 年月日 | 概 | 要 |
|----------|-------------------------------------|---|
| 昭五 一〇、二六 | 大隊長陸軍大尉田村初雄「アピ」到着 | |
| 一〇、二四 | 部隊編成要員として南方緊急補充要員到着 | |
| 二、五 | 編成開始 | |
| 二、五 | 「トワラン」地区へ移動 | |
| 二、九 | 編成完結 | |
| 自 二、二一 | 御差遣待従武官御警衛（於「アピ」） | |
| 二、二五 | 戦地教育 | |
| 一、二六 | 比島方面状況緊迫の總主力を以て「クダツト」へ一部を以て「コタブルド」へ | |
| | 転進の命を受け | |
| 一、二四 | 「カ」中隊「クダツト」に於て対空戦斗 | |
| 二〇、一、一 | 主力の「クダツト」に於て転進集結完了 | |
| 自 一、二〇 | | |
| 至 一、二八 | 「カ」一期築城 | |
| 自 三、三〇 | | |
| 至 五、三〇 | 「カ」二期築城 | |

概

要

| | |
|--------------|-----------------------------------|
| 六、四 | 敵魚雷艇四コクダツトシ湾内侵襲 |
| 五 | 早朝コクダツトシ港及偽陣地を砲撃 |
| 一、二、八 | 各四隻侵襲同様砲撃 |
| 五、下旬 | 以来飛行場等に対する空襲激加す |
| 七、七 | 対空戦斗の後「カーチス」機一機墜す |
| 七、八 | 主力、次で「コタブルド」へ一部を以て「タンブナン」への転進命令受領 |
| 七、二二 | 同右行動開始 |
| 七、二〇 | 主力「コタブルド」到着 |
| | 司令長の指揮に入る |
| | 司令長の命により一中「トラワン」へ派遣 |
| | 「トラワン」 |
| | 「タンブナン」地区の警備に任せしむ |
| 七、二二 | 「タンブナン」転進部隊出発 |
| 七、二四 | 「タンブナン」転進中命令受領伝令により命令を伝達せしむ |
| 七、二〇 八、一五 | 主力は「コタブルド」一部は「タンブナン」地区に於て築城及激襲準備 |
| 八、二 | 「タンブナン」転進部隊復帰命により製塩に任せしむ |
| 八、二〇 | 武力行使の停止を命ぜらる |

六ノナナ

| 年月日 | 概要 |
|----------------------|--------------------|
| 昭二〇、九、二〇 | 被武表解除 |
| 一〇、二〇 | トワランシ地区集結 |
| 一〇、三〇 | アピレ地区集結 |
| 一一、九 | 濠軍收容所へ收容せらる |
| 自二〇、二、一〇 至二二、四、一一 | 連合軍作業に従事 |
| 四、一一 | アピレ出発 |
| 四、二五 | 大竹に到着 |
| 四、二六 | 復員 |
| | 歴代部隊長名 |
| | 千葉原君 津郡久留里町向郷 一四九九 |
| | 陸軍火佐 田村初雄 |

要

5167

(2/2)

1913

独立歩兵第四百五十四大隊部隊略歴

大隊長 山田光秋

| 年月日 | 概 | 要 |
|---------|-------------------------------------|---|
| 昭一九、七、三 | 部隊の大部は南方軍編成要員として内司港出発 | |
| 七、一六 | バシー海峡に於て敵の攻襲を受け一部遭難 | |
| 七、一七 | 各コマニラレ上陸 | |
| 七、一七 | 同地の警備並コセレベスレへの輸送準備に従事セリ | |
| 八、八 | 更にカニ軍転属要員としてヌコマニラレに待機中の濠北方面の部隊復帰へ還院 | |
| 八、一五 | 患者多し或は追及者コマニラレ港に於て乗船 | |
| 八、二三 | コレヒドール湾口を出航す | |
| 八、二四 | セルベス海に於て輸送船機関部に故障を生じ自力航行不能に陥り僚船に曳航せ | |
| 八、二四 | ラレ | |
| 九、二 | スールー群島ホロ島沖着 | |
| 九、二 | 迄にホロ島に上陸す | |
| 一三、一 | 前項要員及便乗者の一部はカ三十七軍に転属せられ | |
| 一三、八 | ホロ島出港掃へ哨し海艇に依り | |
| 一三、九 | タラカン島に上陸 | |

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|-------------------|-----------|-------------|--------|-------------------|--------|--------|--------------|--------|---|---|------------------|----------------|--|
| 昭二〇、三、一 | 年月日 | 概 | | | | | | | | | | | | | |
| 二〇、三、一八 | 二〇、三、二二 | 九八、一九 | 八七、二〇 | 八七、一九 | 五九、七、三 | 要 | | | | | <p>同島に於て独立歩兵や四百五十四大隊の編成を完結す 編成完結迄約八ヶ月の状況に鑑み将来人員の損耗(戦病死)の主因を招来すべ しと觀察せらるる事項を挙ぐれば左の如し</p> <p>給養の不良</p> <p>其の概況左表の如くにして昭和十九年十二月より編成完結迄死亡せるも の約二十七名にして編成完結時大隊の保有患者約二百名なり</p> | | | | |
| タラカン駐留 | ホロ駐留 | 海上輸送 マニラ ホロ | マニラ 帯在 | 海上輸送 マニラ | 區分 | 給養の 良好な る順位 | 主 食 | 副 食 | | 摘 要 | | | | | |
| ノ | ス | 子 | 三 | 四 | | | 五〇〇 | 四〇〇 | 生野菜 (乾野菜) | 乾魚肉 | | 塩 | 味噌 正油 | 其の他 | |
| 五〇〇 | 五〇〇 | 五〇〇 | 四〇〇 | 四〇〇 | | | 八〇〇 | 一〇〇 | 大 | 五 | | 六 | 味大、正油 〇、四一五八瓦 | 油〇、〇四瓦 粉三〇瓦 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |

| 考 備 | |
|--|--|
| <p>生野菜の不足は脚気患者を遂次發生せしむるに至水リ 各人は隊より支給せらる食糧以外、粟物等は物資の不足と所持金の 残りに依り殆んど購入し得ざる状態にて又甘味品等は支給絶無の状 況なり</p> | <p>ス、医薬品の不足 医薬品は輸送間に於ける必要最以限の数量たりしを以て、前述輸送船の故 障は極度に之が不足を来し、タラカン島上陸迄は全く患者の医薬に窮し 病状を増悪せしむるに至る</p> <p>3 衛生部員の不足 タラカン島上陸迄輸送人員三千余名に対し軍医官僅か二四名なりしは患者 の累増に伴い愈々治療を困難ならしめたり</p> <p>4 現地衛生機関の不備 タラカン島へ所在軍病舎は患者満員の為利用し得ず、以外は所在衛生機関 なく、自隊に於て原住民家屋を借用利用する程度にして患者の休養意の如 くなりず、加うるにホロ島、タラカン島に於ける空襲の激化は昼夜の別な く患者の退避行動を強要せしむるに至り安静を著しく妨害す</p> <p>5 船内生活期間比較的長期なりしは著しく体力消耗低下を来せり</p> |

| 年月日 | 概 要 |
|------------------------|--|
| 自昭二〇、三、二一 至昭二〇、三、二一 | <p>独立歩兵第四百五十四大隊としてタラカン島に於て前任務（警備並築城作業）を続行す。</p> <p>戦歿者なし。</p> <p>タラカン島より軟進に際し重症患者及附添人を殺置し、独立歩兵第四百五十五大隊に依託す。</p> <p>残置者は軍命令に依り該隊に転属せらる。</p> <p>軟進の後主力は海軍第二十二特別根拠地隊司令官兼田中中将の指揮下に在りてバリックパン、マンガルカ一飛行場附近、スンボチヤクハラ附近の警備及戦闘一部はマハカム河流域防衛指揮官黒原少将の指揮下に在りてサンガサンガ、アングナ附近の警備に従事す。</p> <p>別紙カ一参照</p> <p>前項地区に於て警備及築城作業中料一枚、下士官兵七名戦死、下士官兵二名行方不明、下士官兵二十五名戦病死す。</p> <p>パリックパン上陸後現地海軍部隊の絶大なる援助に依り患者の治療或は全撤の給養等従前に比し頗る良好となりたるも、体力着減せる患者は恢復するに至らず死亡するに至るも患者の大体は逐日良好に向へり。</p> |
| 自二〇、三、三 至二〇、三、三 | <p>前項地区に於て警備及築城作業中料一枚、下士官兵七名戦死、下士官兵二名行方不明、下士官兵二十五名戦病死す。</p> <p>パリックパン上陸後現地海軍部隊の絶大なる援助に依り患者の治療或は全撤の給養等従前に比し頗る良好となりたるも、体力着減せる患者は恢復するに至らず死亡するに至るも患者の大体は逐日良好に向へり。</p> |

ボルネオ三内

| | | | | |
|---|------------|-------------------------|---------------------------|---------------------------|
| 至自 七、二 七、七 七、四 | 六、二 六、四 | 至自 六、一 六、五 七、三 | 三、下 四、一 四、六 四、三〇 | 三、下 四、一 四、六 四、三〇 |
| <p> タラカン島の戦局敵側に有利に進展するやバリツクパパン方面に対する敵機の爆撃は頓に横極となり、敵機動部隊現出前最も熾烈を極め、爆撃により戦死傷者を出すに至る。 マハカム河口附近に上陸、潜入せる敵謀者捜索の爲、行動中。 同河口に於て敵の反復攻撃を受け、下士官各一名行方不明となり、迄死体捜索せるも発見するに至らず、当時の状況、特に同河の状況よりして戦死者のものと概ね推察し得るも確認するに至らず。 敵機動部隊（重巡三を基幹とする大小百隻内外）現出戦行動に入る。 バリツクパパン、マンガルヤー飛行場附近に敵機動部隊及対空戦に於て、一名戦死、兵（未教育現地派召者）一名逃亡す（陣地後方に逃亡せるを以て當時は敵手に入りたる疑ひなし）。 敵機砲射裏と敵機の爆撃は逐日熾烈化し、前記の戦死者を出す状況となれり。 兵二名逃亡せるものにして、一名は前非を悔み帰隊す。 而して逃亡原因は戦斗の危機に慣れざる一時の発作的原因に存するが如し。 敵バリツクパパンに上陸するや、大隊の主力は突如予期せざる該方面の戦斗に参加を命ぜられ、未明戦場に到着す。 </p> | | | | |

| 年月日 | 概 | 要 |
|--------------------------------------|--|--|
| 昭三〇、七、三 | 敵空襲下大隊本部に伝令勤務に服せる兵一名、途中敵迫撃砲及榴砲滅烈なる集中射撃を受け行方不明となる。 | 敵空襲下大隊本部に伝令勤務に服せる兵一名、途中敵迫撃砲及榴砲滅烈なる集中射撃を受け行方不明となる。 |
| 七、四 | 朝、大隊はマンガル地区に敵上陸の兆あるを以て該地区に復帰を命ぜられ反転行動中、激烈なる榴砲、迫撃砲の集中射撃に捕捉せられ、兵一名受傷、七料海軍患者收容所に入所せしむるに至る。 | 朝、大隊はマンガル地区に敵上陸の兆あるを以て該地区に復帰を命ぜられ反転行動中、激烈なる榴砲、迫撃砲の集中射撃に捕捉せられ、兵一名受傷、七料海軍患者收容所に入所せしむるに至る。 |
| 自 七、四 至 七、六 | バリツクパパン、マンガル地区及サマリダ道五十料附近の戦斗に於て特技一名下士官兵二十二名戦死、特技一名、下士官兵十三名行方不明となれり。敵は爆撃及榴砲射撃掩護下、上陸し来れるも、我之を完全に退却す。敵爆撃及榴砲迫撃砲の射撃を一段と強化し、且ドラム缶を投下、ガソリン焼打或は焼油を地上戦斗に参加せしむ等凄惨なる戦況の下に強引に攻勢前進し来る。大隊は力戦之が裏退に努めたるも、遂に我が中核陣地たる平射砲台を奪取せらるに至れり。 | バリツクパパン、マンガル地区及サマリダ道五十料附近の戦斗に於て特技一名下士官兵二十二名戦死、特技一名、下士官兵十三名行方不明となれり。敵は爆撃及榴砲射撃掩護下、上陸し来れるも、我之を完全に退却す。敵爆撃及榴砲迫撃砲の射撃を一段と強化し、且ドラム缶を投下、ガソリン焼打或は焼油を地上戦斗に参加せしむ等凄惨なる戦況の下に強引に攻勢前進し来る。大隊は力戦之が裏退に努めたるも、遂に我が中核陣地たる平射砲台を奪取せらるに至れり。 |
| 七、四 | 茲に於て、我ニ中隊を以て法幕攻撃に依り之を奪回すべく準備中なりしが、敵の射撃に妨害せられ、夜間攻撃に移行するの止むなきに至り、遂に敵火を冒し夜間攻撃を決行す。 | 茲に於て、我ニ中隊を以て法幕攻撃に依り之を奪回すべく準備中なりしが、敵の射撃に妨害せられ、夜間攻撃に移行するの止むなきに至り、遂に敵火を冒し夜間攻撃を決行す。 |
| 一局部に於ては僅かに成功せるも、激烈なる敵火の爲、遂に奪回するに至らず。 | 一局部に於ては僅かに成功せるも、激烈なる敵火の爲、遂に奪回するに至らず。 | 一局部に於ては僅かに成功せるも、激烈なる敵火の爲、遂に奪回するに至らず。 |

1919

| | | |
|--|-----------------------------------|--|
| <p>至自 七、二九 七、二六</p> | <p>至自 七、一六 七、一八</p> | <p>至自 七、一七 七、一八</p> |
| <p>サマリンド道に前進、同道五十料附近に陣地構築をなす敵機に依る攻襲を受く</p> | <p>本期間下士官兵九名戦死、下士官兵一名行方不明となり。</p> | <p>又カニ中隊の攻襲を容易ならしむる為、右側背攻襲に任じたる方三中隊、カニ小隊はカニ中隊と相前後して攻襲前進す。 該小隊は途中敵の急造トーチカによりする射襲に遭過死傷者を生ずるも屈せず、一進又一進壯烈となる手榴弾戦を展開、敵迫撃砲陣地を突破し、更に力攻せるも遂に敵を裏退するに至らず。 本戦斗は全戦斗中最も熾烈たりしものにして、戦死持校一名、下士官兵十三名行方不明、准士官一名、下士官兵八名を生じたり。 敵は向断なき艦砲及迫撃砲の熾烈なる支援射襲を以て依然執拗なる侵襲を策し攻襲前進し来る。又敵機は数機毎の編隊を以て連日米襲地上戦斗に協力す。扱は予定計画の如くカニ線陣地及複廓陣地等に據り挺身せしむ斬込隊は至敵なる敵警戒線を突破各処に於て大なる戦果を挙げたり。 方三中隊は熾烈なる迫撃砲の射襲下志忠山の複廓陣地に依り、敵の侵襲を封殺せり。 大隊主力は其の後方に於て遊撃據点の構築に挺身せり。</p> |

| 年月日 | 概 | 要 |
|---------------------|---|---|
| 昭和二〇、六一五 至二〇、八一五 | <p>るも殺損害なし</p> <p>「カンボジア」「クハラ」派遣分隊は「カンボジア」「クハラ」附近及サマリ ンダ道間の戦斗に於て、矢一戦死、下士官一名、行方不明となる。</p> <p>本派遣分隊は陸軍伍長武藤善次郎以下七名にしてマンガル地区より約二十八料 の遠隔地に在りて独立任務に服せり。</p> | |
| 六三〇 | <p>二十一時頃敵は約七隻の艦砲射撃支隊の下約一小隊の兵力を以て上陸し来る。 該分隊は所在海軍見張員等（樺島一曹以下十名）と協力之を撤退す。 矢一名戦死す</p> | |
| 七、五 | <p>敵情の監視を継続し「フフ間道」（サマリンダ道四十八料に通ずる土人道）に沿い 後退を開始す。</p> | |
| 七、八 | <p>武藤分隊長は林上等を伴い海軍樺島一曹長谷川上水の共に「カンボジア」油 田地帯附近の敵情搜索の途前進中、十四時三十分頃該地帯に於て彼我共に不意 に遭遇す。</p> | |
| | <p>亦彼は十一を撤退す（約一小隊）</p> <p>帰途に際し再び該油田地帯高地に於て潜伏中の隊より不意に自動火器の齧射を 受けジヤングル内に遮蔽せり。</p> | |

九七六五十四内

| | | | |
|--|--------------------|----------|--------------|
| 七、 五 | 至日 八、 七 五 | 七、 二〇 | 八、 一 九 |
| <p>林上等兵は分隊長と連絡を失し途方なく単独帰還の上分隊長の未だに帰還せざるを知られり。</p> <p>茲に於て分隊は、同日十八時より捜索を実施したるも発見するに至らず、捜索を中止、帰還せり。</p> <p>(海軍下士官兵、又発見し得ず)</p> <p>カンボダヤ附近に集結せる敵の兵力は約一中隊なるものの如く、小数の敵亦候は逐日該分隊の前面に出没するに至る。</p> <p>該分隊は全く大隊と連絡を失うも単独克く其の任務を遂行し、全員病を冒しサマリンド道七十四料附近に進出し、夫々患者收容所に收容せらる。</p> <p>(註、本記事は七月十七日迄記しありし分隊長報告書と帰還人員の言を総合し録せり)</p> <p>大隊はマハカム河流域防衛指揮官の指揮に入り、同流域中部湖地帯附近の战斗中コタバグンに於て兵二名、トスマヤンレに於て兵一名、又転進中サマリンド道七十四料に於て兵一名、戦死す。</p> <p>に至りバリツクパン方面の戦績はサマリンド道に沿ひ両側一帯の大密林地帯に達し、戦斗膠着状態になれり。</p> | | | |

| 年月日 | 概 | 要 |
|--------------------|---|---|
| 昭二〇七、下旬 | マハカム河流域一帯の地は同方面の流域防衛部隊は勿論バリツクパパン方面戦 斗部隊の後援たりしものにして本流域には并々補給基地を設置しつつあり。 敵は湖木地帯附近に人員兵器、資材を降下し、我後方の補給路を遮断し、後方 攪乱を策するの筈に出で | 頃より其の行動頗る露骨化するに至り、我若しく後方の脅威を感受するに至る。 特に敵機による攻害は活発となり |
| 八、六 | 補給基地(海軍山回主計大佐在り)たるコタバグンには二十数機より成る敵 機の攻害を受け所在乗積物資は悉く爆砕或は焼滅せうる。 本戦闘に於て我兵二名爆害に依り戦死す | コタバグン及ムアラムンタイに集結を了り戦闘行動に換る。 |
| 至自 七、二九 八、一〇 | カニ中隊(約四十名)は「スマヤン」に於て白人約十数名を基幹とする土民軍 約百名を攻害し、之を裏退せり。 敵の火力は頗る優勢にして迫撃砲を装備しあり | 大隊は尔後討伐或は警備に旋手中 |
| 至自 五、二 七、二七 | 戦闘行動を停止す。 | 間、陸軍中尉森口二郎一小隊を指揮す |

本レオ四外

至自
六二五
九二二

至自
六一五
八一五

至自
一九一
二八

カンガカンガ地区アンガナ附近の善備戦斗態勢に入り頻繁なる敵機米襲下射空
戦斗を実施しつつ陣地構築中
戦斗行動を停止す。

戦傷死者下士官共六名、戦病死者十七名を出せり。

以上の戦傷病死者は海軍患者収容所に収容後戦歿せるものにして、各機の状態
は治療上幾多困難を極め、特に尿撥の執拗なる収容所の攻害は、患者輿地分故
を強要する状態となり、益々患者の治療を困難ならしめたるによる。

戦病死者は本略歴冒頭に掲記せる患者 又戦斗開始に方り病歿を冒し戦斗
に参加せる者等大部なり。

註、戦斗間発病の主因と思惟する事項左の如し

- 一、 悪症患者の戦斗加入
 - 二、 部隊は予備的兵力なり、常に全員が一線に在りて劇動に服す
 - 三、 給養の不良
 - 四、 用水の少量に伴う汚水の使用
 - 五、 密林内の棲息
- 間に於ける部隊人員損耗表別紙亦二の如し

| 年月日 | 概要 |
|----------|---|
| 昭三、五、中旬 | 以降バンジエルマシン派遣カ二中隊、カ四中隊、砲隊カ二小隊の略歴別冊の如し。 |
| 六、一三 | 右部隊はカ二警備部隊指揮官海軍兼田中尉の命令に依りバンジエルマシン防衛司令官、陸軍宇野少将の指揮下に入りしめられ各々左記の如く出發せり。又前項部隊指揮官として大隊副官陸軍大尉青藤保吉を飛行艇に依り出發せしめたり。 |
| 五、一五 | カ一中隊 一〇六名 |
| 五、二二 | カ四中隊 九一名 |
| 五、三 | 砲隊カ二小隊 四九名 |
| 二〇、一〇、二一 | 青藤大尉出發後陸軍中尉坂田富夫大隊副官を代理す。 |
| 一〇、二 | 終戦後ムアラムンタイに在りし大隊主力は同地出發サマリンドに移動し、茲に於てアングナより移動し同地に在りしか三中隊を掌握す。 |
| 二、七 | サマリンド西方(マハカム河畔)約八料ロアバコン(人煙稀なるジャングル地帯)に移駐し、兵舎の建築或は周墾等に從事し、駐屯するに至り。部隊行動概要の示すこと別紙一の如し 部隊は食糧難打開の爲、年末迄に約三町歩農耕地を開墾し播種植付等を完了し |

本ルテカ五内

野萊等の自給態勢を確立せり。
以降糧食関係概況別紙オ三の如し

ハニ
一〇
戦斗行動停止以降に於ける戦傷病者数別紙ア二の如し
停戦後に於ける食糧事情と医薬品の不足、患者収容所の不備、戦後の体力低下
其の他全般の悪環境は可惜戦死者を生ずるの止むなき状態に至れり。
以降患者概況別紙ア四の如し

ニ一、一
ニ一、二
至白
ニ一、七
大隊は現地復員完結と共に独立混成隊五十六旅団に収属せられたり。
大隊長は海軍戦史館纂資料提出の為バリツクパパン出張レバリツクパパンに集

結しあるバンジュールマシン派遣部隊と約ハケ月後に於て連絡放り一同良く団結
し無事忍苦の生活を営みある状況を承知し帰隊す
部隊連名箋及戦死者、行方不明者名箋別冊の如し

ニ二
職員表等別紙ア五の如し
内地帰還の為出発
復員完結す

歴代部隊長名
火佐 山田光秋
部隊事情精通者

| 年月日 | 概 | 要 |
|-----|--|---|
| | <p>福島県大沼郡王路村大字大石字家北二二九六 陸軍火佐 山田光秋</p> <p>福島県那麻郡山都村字木曾五三五 陸軍大尉 斎藤保吉</p> <p>茨城県鹿嶋郡鹿嶋町宮中二四一五 陸軍中尉 坂田富夫</p> <p>栃木県足利郡山辺町大字田中一六四 陸軍中尉 金子藤作</p> <p>新潟県西蒲原郡小中川村大字中川二一五五 陸軍中尉 石田哲一郎</p> <p>宮城県牡鹿郡楢井村田字折立二六 陸軍中尉 阿部正人</p> | |

0001

(281)

1927

独立歩兵第四五五大隊部隊略歴

大隊長 常井忠雄

年月日

概

要

コタラカンレ島守備隊編成

守備部隊長 芥二 警備隊司令

海軍中佐 春 博

海軍部隊 約五〇〇名

独立歩兵第四五五大隊(約七七〇名)

長 大佐 常井忠雄

現地召集者 約二〇〇名

邦人 約五〇〇名

敵未攻前の状況

敵未攻前の状況
ノ 敵機のコタラカンレ地区偵察漸次頻繁となり、又在コパリラクパンシ
ニ 二十二特別根據地帯よりする回島への補給遮断の為コマンカリハヲトシ岬
附近に於ける敵潜水艦の本没着しく増加し昭和十九年末にはコパリツクパ
パンレコタラカンレ間の補給輸送殆んど杜絶するに至れり、然れ共同時頃
迄には矢張り及邦人に対する約半年分の糧秣集積及戦いに支障なき程度の兵
器の輸送を終へたり。

昭一九、一〇、以降

年月日

昭五、二、末

概

要

戦爆連合の約三〇機の初空襲を受け燃料極貯油「タンク」の大半を焼失す。当時燃料資源採取の為資材は相当莫大なるものを擁したるも之を防衛方面に転用せんとする意志はなかりき。

海軍部隊の有せし対空火器はぶミリニ併装四基の微々たるものにして高角砲四門十八年末「ニューギニヤ」の方に転用せられたり。

一九

ホ口滞泊の二ヶ大隊を転用して警備隊司令の指揮下に入れ、一大隊（半大隊）を「アマール」河口附近に、一大隊半を燃料地帯「タラカン」市街を含む地帯に海軍を以て飛行場を含む地帯の防衛に当らしめたるも、南方軍命令に依る兵力不備改変により

二〇、二、末

一ヶ大隊を抽出し「バリヲクパパン」に転用せり。作業等の為約四ヶ月の餘裕を得たるに過ぎずして敵来攻迄の諸準備は不充分の点多かりしもの如し。

四三〇

敵来攻時の状況

「アマール」監視哨敵艦発見の報に依り戦士態勢に移行す。

当初上陸地点判定は西進なりしも同月以降小艇艇「タラカン」南端より

「タラカン」西方に移動し機雷掃海等頻繁となるや概ねその主力を西方に移動上陸するものと判断せられたり。

ホルネオ六六

共、南

ス

敵の上陸は頗る慎重にして約一週間に亘り連日偵察掃海上陸準備を為し、夜間は遠く東方に待避するを常とせり。

五、一

三

朝上陸用舟艇十数隻を以て艦砲射撃に腐接し来りしも棄退せり。

五、二

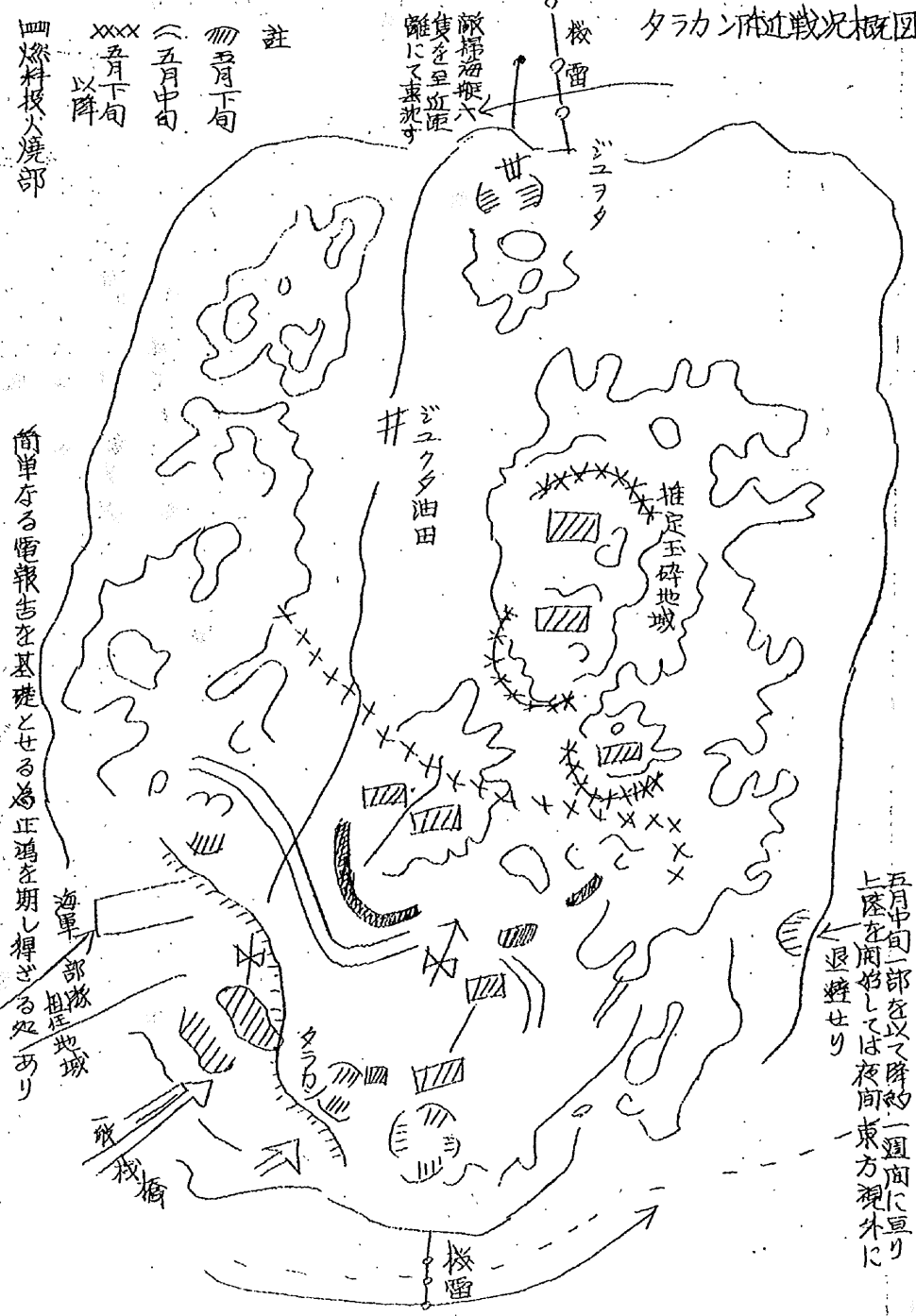
四

艦砲爆撃激烈を極め、方一敵の保持困難となるや上陸用舟艇を以て一挙に投擲地区に上陸し海岸地帯を確保せり。

々

亦後回の如き戦斗状況に入り玉碎したるものの如し

タラカン附近戦況概図



註
 〰 五月中旬
 XXX 五下旬以降
 〰 燃料投入焼部

簡単な電報吉を基礎とせる為正鴻を期し得ざる処あり

五月中旬一部を以て降約一週間に亘り上陸を開始しては夜間東方視外に退避せり

第三十七軍独立歩兵第五三大隊部隊略歴（遊一〇一四）

陸軍少佐 有谷辰蔵

| 年月日 | 概 | 要 |
|----------|-----------------------------|---|
| 昭一六、九、三三 | 独立混成隊四連隊を二大隊として岡山に於て編成 | |
| 一〇、 | 北部仏印に進駐警備 | |
| 一七、二、 | 南「ボルネオ」コロンチヤナツクレに上陸 | |
| 五、 | 同地附近討伐並に警備 | |
| 一〇、三、 | ボルネオ安備軍の隷下に入る | |
| 一九、二、 | 独立安備隊を四十六大隊に附編 | |
| 二〇、三、二五 | 北ボルネオの警備 | |
| 五、一、五 | ボルネオ安備軍を三十七軍に改編に伴い令軍の隷下に入る | |
| 六、八 | 独立歩兵第五三大隊に改編 | |
| 一〇、三、五 | 独立混成隊五十六旅団指揮下に入る | |
| 三、二、一〇 | ボルネオ燃料工隊長の指揮下に入り「ミリ」地区戦斗に参加 | |
| 三、九 | 「クナン」集結に伴い独立混成隊七十一旅団の指揮下に入る | |
| 三、一〇 | 「クナン」出港 | |
| 三、一〇 | 大竹上陸 入院患者七名復員 | |
| 三、一〇 | 復員完結 六三一名復員 | |

独立歩兵ヲ五五四大隊部隊略歴 (遊一〇一五)

| 年月日 | 概要 |
|---------|---|
| 昭十六、一 | 内地出發時の編成 |
| 一〇、一〇 | 混成ヲ四聯隊(歩兵三大隊騎兵一中隊、工兵一中隊、砲兵一中隊) 仏領印度支那ヲハイホンレ上陸 |
| 一七、三 | 北ヲ仏印警備隊長の指揮に入る |
| 一五、 | 北ヲボルネオレ上陸 |
| 一〇、 | ボルネオ守備軍隷下編入 |
| 一八、三 | 独立守備歩兵ヲ四十一大隊に編成替 |
| 一九、三 | 南方ヲ二鉄道監部の指揮に入る(泰國に転進) |
| 一九、八 | 北ヲボルネオレに復帰 |
| 二〇、二、二五 | ヲ三十七軍に隷下替 |
| 二〇、二、二五 | 軍令陸ヲ一〇号並に陸軍機密室ヲ四十二号に依り独立歩兵ヲ五五四大隊編成完 |
| 結 | カ一次復員 (先發要員、炭炭要員) |
| 三、三、一八 | 村枝一、下士官一、兵三、計四 |
| 三、三、一 | 復員船「ばごたし」により北ヲボルネオレ「ビツセントン」上陸 |
| 三、三、一 | 大竹に上陸 |

1934

| 年 月 日 | 概 | 要 |
|-------------|--|---|
| 昭二一、四、二五 | <p> 一、二次復員（学校教員及家族携行者） 将校一、下士官一、兵三、計五、復員により帰還、詳細不明 其他ポルネオ各部隊と共に復員せるものあるも詳細不明 一、三次復員、将校以下四〇〇名 復員 残留者 抑留者、将校四、下士官三、兵一、計八 欠領部隊に勤務中の者一名、帰還せるものと予想せる者詳細不明 </p> | |

独立歩兵七七四大隊部隊略歴 (遊一〇二七)

部隊長 陸軍大尉 千葉晃友

年月日

概

要

昭三〇、六、一

北ボルネオ西海州ホーポート泉「テノムレ」に於て編成せらる。

特選大隊の名のある如く在北ボルネオ在住の日本人並に軍属を召集して編成、

専ら食糧増産並に軍司令部直接警備

敵ボーポート進攻に当り千葉大隊(ニヶ中隊)同地に前進警備防禦、戦斗に参

加、

編成装備並指揮隷属関係

大隊本部 四ヶ中隊(其の他未編成)

装備 各人 小銃 其の他なし

軍司令部直轄

主要参加作戦

「テノムレ」「サホン」地区警備 戦死四名

ホーポート附近の戦斗参加 戦病死九五名

「シンパンゼン」附近の警備

自三〇、六、一
至三〇、七、

至六、六、二五
七、三六

八、一五

| 年月日 | 概 |
|--------|--|
| 昭二〇、八 | <p>終戦後 戦病死 三六名 補給関係 繰放当時より糧秣不足 三部隊自隊増産隊として自活す 衛生関係 頃よりマラリヤレ 部隊内に蔓延し 栄養失調を併発し 死亡するもの多し 終戦より帰還途の行動 北ボルネオ西海州ポートポート泉（ミンバングン）にて終戦となり 連合軍の命に依りポートポート収容所に向い出発 同所に収容され パパール収容所に移り アピ収容所に移る 一部は連合軍司令部所在地前回島（日本名）に移り 帰還の為アピ出発 鹿兒島保大付港上陸復員 部隊の経歴中特異と認めらるる事項 部隊特別建設大隊として食糧増産に、物資輸送に従う。其の間戦斗に参加す 歴代部隊長名</p> |
| 八、一四 | |
| 又、三〇 | |
| 一〇、一 | |
| 五、下旬 | |
| 二、下旬 | |
| 一〇、下旬 | |
| 二、四、七旬 | |
| 四、一五 | |

北ボルネオ内

編次当時

陸軍中佐

西依八造

(297)

1938

| 年月日 | 概要 |
|------------|--|
| 昭二九 九三〇 | <p>満州回東滿總省林口泉林口 電信ヲ四聯隊に於て落成完結 指揮班 (三十八名) カ一小隊 (八十名) カ二小隊 (八十名) カ三小隊 (八十名) 器材小隊 (三十四名) 計 三〇二名</p> <p>カ四通信隊の指揮下に入れり 満洲より転進 内地門司港出帆 昭南着</p> |
| 〇六 | 昭南出帆 |
| 一〇、二六 | 北ボルネオコクチンレ出帆 |
| 一一、九 | 北緯零度五十一分、東經百八度一分の地点にて敵魚雷の攻撃を受け風崎火尉以 |
| 一三、三五 | |

カ三十七軍獨立有線ヲ二四中隊部隊昭歴(維一二九七一)
 部隊長 陸軍中尉 藤田 武夫
 崇務主任 陸軍曹長 吉田 等

要

| | | |
|-----|-----------------------------|--|
| 三三六 | 下二十二名の戦死を出す コクナシ着 | |
| 三三六 | 陸軍中尉藤田武夫中隊長を命謀せらる | |
| 三三八 | 北ボルネオ西海州「アピ」港出發 | |
| 三三九 | 部隊 二九名にて主力(一〇一名)はぼごた丸にて大竹上陸 | |
| 三三〇 | 復員完結 | |
| | 帰還人員(含入院)内訳 | |
| | 科長 二、准士官 一、下士官 二、兵 七七 計 一〇一 | |
| | 入院患者 下士官 一 | |
| | 歿置人員内訳 | |
| | ゼツセルトン収容所 三名 | |
| | ゼツセルトン病院に入院せるもの 三名 | |
| | 右同病院に勤務せるもの 二名 | |
| | ヤパン島 二名 | |
| | ラバン島 一名 | |
| 三三九 | カ一次復員者より二名入院せり | |
| | 遺留品 八十四名分 | |

| 年月日 | 概要 |
|---------|---|
| 昭一九九、三〇 | <p>釜山に於て編成完結 加四通信隊長の指揮に入る 村枝一 主下士一、兵下士一、衛下士一、外下士官共五一名 計 五十五名 北ボルネオ上陸 共十五名編入 終戦処理の爲下士官以下一四 独立無線百三十一小隊に転属 部隊主力復員完了</p> |
| 二〇、一〇 | <p>歴代部隊長名 鹿児島県鹿児島市加治屋町一九六</p> |
| 二一、四一四 | <p>陸軍中尉 富田時男</p> |

方三十七軍独立無線方一一九小隊部隊略歴（濠一三九八〇）

昭一九九、三〇